

フィールド
担当官のある一日2005年
5月某日

齊藤香織

6:30

出勤。今日はUNHCRのプロジェクトが行われているインディオの村々への4日間の出張の初日。早めに出発する。

人数分の食料を車に積み込む。命綱である衛星電話のバッテリーが充電されているかチェック。出張中の動きをフォローしてくれるアパルタド事務所職員のデニスとの最終確認。今回の出張の行き先と日程は首都ボゴタ事務所にすでに報告しており、訪問先地域の安全については特に問題ないことが確認されている。

出発。メンバーはUNHCRの女性・教育プロジェクト担当者としてインディオのプロジェクトを担当する人類学者、事業実施パートナーNGOからの担当者二人と私。

車からスピードボートに乗り換える。ここからは川が交通路。

アトラト川の主流を上り、チョコ県リオスシオ市に着く。デニスに衛星電話で到着を簡潔に報告。チョコ県ではアフリカ系コロンビア人とインディオの少数民族が大多数を占める。美しい自然と鉱山などの豊富な資源に恵まれているが全国で一番貧しい県であり、資源を巡って紛争が絶えない。リオスシオに逃げてきた国内避難民は多い。ここで、人権コミュニティーオンブズマンと合流。人権オンブズマン事務所（Office of the Human Rights Ombudsman）は避難民の権利を守る国の機関であり、UNHCRはこの事務所の活動を促進するための支援をしている。アトラト川下流インディオのリーダーの団体とミーティング。土地に根付いて生活をするインディオの人々は、紛争で避難を強いられてもなおこの土地に残って生活しようとするため、危険にさらされている。



チョコ県リオスシオ川のほとり。国内避難民の少女
K.Saito 2005

12:00

リオスシオを出発。デニスに再度連絡。今度は二艘の木製ボートでアトラト川支流に入る。

この辺りで勢力の強い準軍（パラミタリー）の基地の脇を通る。ボートのエンジン音を聞いてAK47を手にしわらわらと岸辺にやってくる武装した男たち。黒のTシャツと迷彩色のズボンというお決まりのいでたち。無表情でこちらの動きを追う。UNHCRの青い旗を翻し、こちらが誰であることを明確にする。国際機関が辺境に入っていることを見せることは、ここの一般市民にも国際社会がついていますよ、というメッセージを送ることにもなる。これもUNHCRの行う国内避難民の保護活動の一環である。

トラブル発生。一艘のボートの底に穴が開いてしまう。慌てて川岸に移動。ボートをどこかで借りるしかない。壊れていないもう一艘の荷を降ろし、二人がボートの手配に行き、残りは川岸

で待機。デニスに連絡をして状況を説明し、ボゴタ事務所の安全対策担当のビッキーにも連絡を入れる。ここで問題なのは、目指す村に日暮れ前に着かないかもしれないということ。暗い中で移動するのは危険が増すためご法度だが、こういった場合にはやむを得ない。

最寄りの村からボートを借りることが出来た。エンジンを移して荷物を積み再出発。壊れたボートはその村の人達が修復しておいてくれるとのこと。感謝して出発する。再度デニスに連絡。

夕暮れ時。蚊が増えてくる。服の上から刺してくる上に刺された所は赤く腫れ上がる。マラリアもこの地域は多い。虫除けスプレーを皆で回してつける。

日が落ちて暗くなっていく。ボートはしばしば浅瀬に乗り上げるので、交互に降りては押す。暗くなってからは30分おきにビッキーと連絡を取る。

20:10

ようやく目指す村に到着。暗闇の中ろうそくの明かりが揺らめくのが見えてほっとする。村人たちが出迎えてくれ、ボートを引き、荷物を運ぶのを手伝ってくれる。村のリーダーに紹介され、挨拶。ビッキーに最終連絡。

持ってきたクラッカーとツナ缶で、簡単な夕食。身体は疲労しているが気持ちがいい。学校に使われている小屋に案内され、懐中電灯の光の中でそれぞれ蚊帳をつり、テントを組立てる。

明日の簡単な打ち合わせを簡単にして、就寝。



Profile

(さいとう かおり)

1971年生まれ。シガン大学卒。エール大学にて公衆衛生修士号を取得。1997年、JPOとしてUNHCRのミャンマー事務所の職員に。その後2000年8月から12月まで世界食糧計画(WFP)の職員としてアンゴラ事務所勤務。翌年UNHCRに戻り、グルジア、パキスタン、ザンビア、コロンビア事務所勤務を経て、現在ロンドン大学スクールオブエコノミクス(LSE)で国際人権法修士課程に在籍。